

令和3年度
入学試験問題

国語

2月1日 第1限

仁愛女子高等学校

一
次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

夏目漱石は、「働く」ことは人間性のうちのある部分しか使わないものだと思ながらも、「人は働かねばならない」と考えていた。「労働は神聖である」などとはぜんぜん考えていない現代のわれわれも、やはり「働いてこそ一人前である」と言います。そして、一部の人をノゾ^aけば、「食べていける資産を持っていよう」といまいと、やっぱり働くべきだ」と思っています。

では、なぜわれわれはそう思うのでしょうか。①最初の問いに戻って、「働く」ということの意味は何なのか、考えてみましょう。

先日、ワーキングプアに関するNHKのテレビ番組を見ていたら、三代半ばのホームレスの男性のことが紹介されていて、いろいろ教えられるところがありました。その男性は公園に寝泊まりし、ゴミ箱から週刊誌などを拾って売り、命をつないできたのですが、運よく市役所から、一カ月のうちの幾日か、道路の清掃をする仕事をもらうことができたのです。番組は彼の姿を追っているいろいろ話を聞くのですが、その彼が最後に目頭を押さえて泣くシーンが映し出されました。

彼によると、一年前だったら、何があっても涙が出ることはなかったそうです。(A)彼は、働いているときに、人から声をかけられたのです。何という言葉をかけられたのかわかりませんが、たぶん、「ご苦労さま」に類するような言葉だったのではないのでしょうか。②「以前は、生まれてこなければよかったと言っていましたか？」という取材者の問いに、「今も、そう思う」と答えた彼は、ちゃんと社会復帰すれば、生まれてきてよかったとなるんじゃないか、と言って言葉をつまらせます。そして、前だったら泣かなかった、普通の人間としての感情が戻ったのかもしれない、と言うのです。

これはとてもシヨウ^cウチヨウ^c的で、「人が働く」という行為のいちばん底にあるものが何なのかを教えてくれる気がします。

それは、「社会の中で、自分の存在を認められる」ということです。同じようにその場にいても、ホームレスとしてたまたま通りかかったただけだったら、声をかけられることはなかったはずで、一生懸命働いていたからこそ、③ねぎ³らしいの声をかけられた。

人がいちばんつらいのは、「自分を見捨てられている」誰からも顧み^{*2}られない」という思いではないでしょうか。誰からも顧みられ

なければ、の中に存在していないのと同じことになってしまうのです。

社会というのは、基本的には見知らぬ者同士が集まっている集合体であり、だから、そこで生きるためには、他者から何らかの形で仲間として承認される必要があります。そのための手段が、働くということなのです。働くことによって初めて「そこにいい」という承認が与えられる。

働くことを「社会に出る」と言い、働いている人のことを「社会人」と称しますが、それは、そういう意味なのです。「一人前になる」とはそういう意味なのです。

社会の中で人間同士のつながりは、深い友情関係や恋人関係、家族関係などとは違った面があります。(B)、社会の中でつながりも「相互承認」の関係には違いないのですが、この場合は、私は「アテンション(ねぎらいのまなざしを向けること)」というような表現がいちばん近いのではないかと思います。清掃をしていた彼がもらった言葉は、まさにアテンションだったのではないのでしょうか。

ですから、私は「人はなぜ働かなければならないのか」という問いの答えは、「他者からのアテンション」そして「他者へのアテンション」だと言いたいと思います。^④それを抜きにして、働くことの意味はありえないと思います。その仕事が彼にとってやり甲斐のあるものなのかとか、彼の夢を実現するものなのかといったことは次の段階の話です。

(C)、もう一つ言えば、このアテンションという「承認のまなざし」は、家族ではなく、社会的な他者から与えられる必要があるのだらうと思います。

ここで再び『それから』^{*3}の代助^{だいすけ}を思い出します。以前の代助は完全に「自分の世界」に生きていました。(D) 自己完結の輪の上を生きていたわけです。ところが、三千代への愛によってぷつと輪が切れた。そして、現実社会の中で新しい輪とつながろうとするときには、父や兄という家族とのエン^dが切れる。これはなかなかよく練^eられた仕掛けではないかと思えます。

そのような意味で、先ほども言いましたが、『それから』という小説は、相当^{*4}の意を用いて書かれた小説なのです。

※1 ワーキングプア：正規雇用者と同じようにフルタイムで働いても、生活保護の水準以下の収入しか得られない社会層、いわゆる

「働く貧困層」を指す。

※2 顧みられていない：気にかけていない。心配されていない。

※3 『それから』：夏目漱石の長編小説。主人公の代助は三十歳になっても定職に就かず、月に一度、家から金をもらって生活している。

彼は裕福な暮らしをしているので、生活のために労働することを価値のないものだと考えている。その後、友人の妻である三千代と共に生きるという覚悟を彼が決めたことで、家族や友人を捨て、これまでの考えを変えなければならなくなった。

※4 相当の意を用いて：かなり考えて

問一 二重傍線の部分 a 「ノゾ」・ b 「目頭」・ c 「シヨウチョウ」・ d 「エン」・ e 「練」のカタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書け。

問二 傍線の部分①「なぜわれわれはそう思うのでしょうか。」とあるが、「そう」はどのようなことを指すか。文章の中の言葉を用いて説明せよ。

問三 (A) (D) に入る最も適当なものの記号をそれぞれ書け。

ア すなわち イ もちろん ウ そして エ ところが

問四 傍線の部分②「以前は、生まれてこなければよかったと言っていましたか？」を文節に区切るとどうなるか。最も適当なものの記号を書け。

ア 以前は、／生ま／れ／て／こな／ければ／よかったと／言っていましたか？

イ 以前は、／生まれて／こな／ければ／よかった／と／言っていましたか？

ウ 以前は、／生まれて／こなければ／よかったと／言っていましたか？

エ 以前は、／生まれ／て／こなければ／よかった／と／言っていましたか？

問五 傍線の部分③「ねぎらい」の意味として、最も適当なものの記号を書け。

ア 感謝 イ 激励 ウ 歓喜 エ 非難

問六 に入る最も適当な言葉を文章の中から二字で抜き出して書け。

問七 傍線の部分④「それを抜きにして、働くことの意味はありえないと思います。」とあるが、筆者は働くことの意味をどのようなことと考えているか。文章の中の言葉を用いて、五十字以上、六十字以内で書け。（句読点を含む。）

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

早く眠りたい。

目を閉じると、今度はさっき見た情報バラエティ番組の映像が脳内でよみがえる。^{*2} シャットダウンしてしまいたいのに、閉じた目に力を入れるほど、かえってハッキリと再生される。もう見返したくはないけれど、録画までした数分の映像。

スタジオのタレントたちが、おいしい、この値段で買えるなんて信じられない、とゼツサン^aしていたレモンのパウンドケーキ^{*3}。フラモスのスイーツだ。三月に入ってすぐ売り出されたばかりの新商品。

全国シエア^{*4}一位のコンビニチェーンであるフラモスは、スイーツ部門の売り上げも独走状態にある。四位のわたしたちとは、まるで比べものにならない。

店舗数が違うのだから仕方ない、と自分に言い聞かせてみてはいるけれど、もちろんその差だけではないのは痛感している。開発関係の人数や費用といったことだけでなく、^①企業努力^①がフラモスにはしっかりとある。人気菓子店とのコラボや、原材料へのこだわりや、食べやすさ。あらゆる視点で分析や試作を繰り返していることが、毎週売り出されるいくつもの新商品から伝わってくる。

何よりも味。確かにおいしい。パッケージから出してお皿に乗せられ、菓子店のものだと言われたら、信じてしまうかもしれない。実際、^b手土産^bにされることも増えているのだと、広報担当が雑誌で話していたのを読んだことがある。

商品がテレビや雑誌で取り上げられる頻度は、必ずしも売り上げに比例しない。もちろん向こうから取材依頼が来ることだってあるけれど、宣伝広告の一環として、コンビニチェーン側からお願いすることもある。

何を考えていても、どうしても心がざわついてしまう。眠気は全然訪れない。むしろ遠ざかっているような気すらしてしまう。もしも、さくらじゃなくてレモンを選んでいたら、さっきのテレビ画面に映るのは、わたしたちの商品だったのだろうか。

「いいか、悔やんでいるヒマ^cがあったら、その分練習しろ。後ろじゃなくて前を見るんだ。後ろを見たって前には進めない。お前

「たちが今すべきことは、後悔じゃなくて練習だ」

② 高校時代のテニス部の顧問の言葉を思い出す。試合に負けた後のロッカールームで、涙ぐむわたしたちに向けられたものだった。以来、社会人になってからも時々思い出していた。後悔じゃなくて練習。まったくもって正しい言葉だと、あれから十年ほどが経った今でも思う。けれど正しいことばかりを実行できるわけじゃないというのも、また真実だ。

今月、わたしたちは、春の新製品として、さくらのパウンドケーキを発売した。開発担当者はわたしだ。市場調査と、上司への提案と、いやになるほどの試食開発と、マネージャー以上の役職者も呼んでの試食会議をくぐり抜けて、ようやく商品化されたものだった。今回に始まったことではなく、商品になるものはいっただってそうだ。思いついてからすぐにできるものなんてない。

試食開発の段階では、ほぼ毎日、同じようなものを食べつづける。卵の量や砂糖の量を少し変えるだけでも、オドロクほど味は変わる。窓のないテストキッチンで、スツールに座り、並んだケーキを食べつづけているうちに、時間はあつというまに過ぎてしまう。会議が迫って、開発が正念場に入ってくると、一日、自分の開発している商品しか食べていないということも出てくる。

今回のパウンドケーキで、最終段階まで迷っていたのは、粉を多めにして重めの食感を出すかということと、そもそもの素材をどうするかということだった。めったにないことだった。会議が近づいていっても、素材が絞りきれなかったのは。

そして、直前までさくらのパウンドケーキと天秤にかけて悩んでいたのは、ほかでもない、レモンのパウンドケーキだったのだ。

発売の少し前になって、レモンのパウンドケーキがフラモスから出ると知り、複雑な思いがした。もちろん、かぶらなくてよかったという安堵もあった。ただ一方では、そちらのほうがよかったのではないかという後悔が生まれた。シェア一位の会社を選んだのが、レモンであったなら、そちらがベターだったのではないだろうか。

発売されてすぐに食べた。フラモスの商品は、思ったとおりおいしかった。レモンピールも入っていて、異なる食感が楽しめるし、味の変化もおもしろい。かといって、自分たちがテストキッチンで試食していたものも、負けていなかったと思え、正面から同じ商品で対決してみたかったという気もした。

それでもさくらのパウンドケーキの売り上げは悪くないようだったし、社内や友人から聞こえてくる評判もまあまあだった。

商品が売り出されてしまえば、わたしのすることはなくなる。売り出すための努力をしたり、売場に並べたりするのは、また他の人たちの仕事だからだ。売れるように願うのはもちろんだけど、いつまでも同じものにしがみついてこだわってはいられない。新製品は毎週いくつも発売されるのだし、既に次の開発に向け動き出しているのだから。

だから正直、あまり深く考えてもいなかったのだ。数日前に社内で、フラモスのスイーツがテレビで紹介されるらしいと聞くまでは、おいしい、と交わされる声。^④ さっきの番組で映るのが、わたしたちの開発したパウンドケーキである可能性だって、本当は充分にあつたはずなのに。

目を閉じたまま、寝返りを打つ。胃だけでなく、身体全体が重たくなったように感じられる。

わたしの選択は、間違っていたのだろうか。

いくつかある選択肢のうち、何か一つを選ぶということは、他の何かを選ばないということとイコールなのだと、開発部門にきてから、意識させられるようになった。

^⑤ Aにつづく道を選んだ瞬間、Bにつづく道は崩れ落ちる。歩きはじめたあとで、険しい道だとわかって、戻って選ぶなおすことはできない。

意識的なものだけじゃなく、無意識的にも、あらゆる選択を繰り返しているのだろう。（中略）

こんなふうに夜が長く感じられる日には、ずっと心に蓋^{ふた}をしていたはずのことにまで思考が広がってしまう。キオクや感情、そして後悔に、わたし自身まで包まれそうになる。明日も仕事なのに。一分でも早く眠らなければいけないのに。

（加藤千恵『点をつなぐ』による）

- ※1 情報バラエティ番組：ゲストを招いてさまざまな企画を行う番組。
- ※2 シャットダウン：コンピュータのシステムを、周辺機器などに影響なく終了する操作。
- ※3 パウンドケーキ：バター・小麦粉・砂糖・卵などを混ぜ合わせて焼いた洋菓子。
- ※4 シェア：市場に売り出される製品で、ひとつの企業が占める割合。
- ※5 コラボ：共同製作。
- ※6 パッケージ：容器。
- ※7 ロックールーム：選手の控室。
- ※8 マネージャー：管理・運営を行う責任者。
- ※9 テストキッチン：試作品を作る調理場。
- ※10 スツール：椅子。
- ※11 天秤：重さを比較して、質量を測定する装置。はかり。
- ※12 安堵：安心。
- ※13 ベター：より良いもの。
- ※14 レモンピール：レモンの皮の砂糖漬け。

問一 二重傍線の部分a「ゼッサン」・b「手土産」・c「ヒマ」・d「オドロ」・e「キオク」のカタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで書け。

問二 傍線の部分①「企業努力」とあるが、それがわかる部分を、文章の中から二十字以上で二つ抜き出し、最初の五字をそれぞれ書け。（句読点を含む。）

問三 傍線の部分②「高校時代のテニス部の顧問の言葉を思い出す。」のはなぜだと考えられるか。その理由を、解答欄の「」から。」に続くように、文章の中から二十字で抜き出して書け。(句読点を含む。)

問四 傍線の部分③「正念場」の意味として、最も適当なものの記号を書け。

- ア 正確な場所 イ 確実な場面 ウ 重要な局面 エ 客観的な立場

問五 傍線の部分④「さっきの番組で映るのが、わたしたちの開発したパウンドケーキである可能性だって、本当は充分にあったはずなのに。」と思った理由として、**適当でないもの**の記号を一つ書け。

ア 取材依頼もあるが、宣伝広告としてコンビニチェーン側からお願いすることもあるから。

イ 自分たちがテストキッチンで試食していたレモンのパウンドケーキも、負けていなかったと思えたから。

ウ さくらのパウンドケーキの売り上げは悪くないようだったし、社内や友人から聞こえてくる評判もまあまあだったから。

エ 新製品は毎週いくつも発売されるのだし、既に次の開発に向け動き出しているから。

問六 傍線の部分⑤「Aにつづく道を選んだ瞬間、Bにつづく道は崩れ落ちる。」は、どのようなことをたとえているか。「春の新商品」という言葉を用いて、四十字以上、五十字以内で書け。(句読点を含む。)

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

博雅^{はくが}三位^{さんみ}、月の明^{あか}かりける夜、直衣^{なほし}にて、朱雀門^{すざくもん}の前に遊びて、夜もすがら、笛を吹かれけるに、同じさまに、直衣着たる男の、笛吹きければ、「誰^{たれ}ならむ」と思ふほどに、その笛の音^ね、この世に類^{たぐひ}なくめでたく聞えければ、あやしくて、近寄りて見ければ、いまだ見ぬ人なりけり。我^{われ}も物をいはず、かれもいふことなし。かくのごとく、月の夜ごとに行き会ひて、吹くこと、夜^よごろになりぬ。

② かの人の笛の音、ことにめでたかりければ、試みに、かれを取りかへて吹きければ、世になきほどの笛なり。その後^{のち}、なほなほ月ごろになれば、行き会ひて吹きけれど、「もとの笛を返し取らむ」ともいはざりければ、ながくかへてやみにけり。三位失^うせて後、帝^{みかど}、この笛を召して、時の笛吹^{ふえふき}どもに吹かせらるれど、その音を吹きあらはす人なかりけり。

③ その後、浄蔵^{じやうざう}といふ、めでたき笛吹ありけり。召して吹かせ給^{たま}ふに、かの三位に劣らざりければ、帝、御感^{ぎよかん}ありて、「この笛の主、朱雀門のあたりにて得たりけるとこそ聞け。浄蔵、この所に行きて、吹け」と仰^{おほ}せられければ、月の夜、仰^{こと}せの如く、かれに行きて、この笛を吹きけるに、かの門の楼上^{ろうじやう}に、高く大きな音^{おと}にて、^④「なほ逸物^{いちぶつ}かな」とほめけるを、「かく」と奏しければ、初めて鬼の笛と知ろしめしけり。

博雅三位の源博雅公^{※1ひろまさこう}が、美しい月の夜、^{※2のうし}直衣を召されて、一晚中、朱雀門^{※3}の前で笛をお吹きになっていた。すると、まったく同じような直衣姿の男が笛を吹いていた。「いったい誰^{だれ}なのだろう」と心の中で思っていた。その笛の音は、この世で聞いたこともないような見事な音色であったので、^①(の現代語訳)、近づいてみると、初めて見る人だった。博雅三位の方から声をかけることもなく、また、その男からも声をかけてくることはなかった。ただ、そんなふうにして、月の明るい晩には、必ず行き合い互いに笛を吹き合い、幾晩かが過ぎていったのだった。

さて、その男の笛の音がとても素晴^{すば}らしかったので、三位は笛を取り替えてもらって、試しに吹いてみた。この世の物とは思われない

ような最高の笛であった。その後も同じように出会って、何か月か経った。毎度、笛を吹き合ったが、「この間の笛を返してほしい」とも言わなかったので、長らく返すこともなく、とうとうそのままになってしまった。三位が亡くなってから、帝がこの笛をお召しになり、時の笛吹たちに吹かせられたのだけれど、博雅三位と同じような音を出せる人は、誰一人としていなかった。

その後、^{※4}浄蔵という、とても上手な笛の名人がいた。帝は浄蔵を召してお吹かせになられたところ、博雅三位とくらべて、決してひけは取らなかった。帝はとても感心なさって、「この笛の持主の博雅は、朱雀門の辺りで手に入れたと言っていた。お前もそこに行って、この笛を吹いてみよう」とおっしゃったので、月の夜の晩に、帝の仰せの通りに朱雀門の所で笛を吹き鳴らした。すると、^{※5}門の楼の上から、とてもない大きな声で、「最高の優れ物だ」という嘆声^{※6}が聞えてきた。浄蔵は帝に、「こういう事がございました」と^{※7}奏上した。こうして、初めてこの笛が朱雀門の鬼の持ち物であったことがわかったのである。

(浅見和彦「日本の古典を読む『十訓抄』」による)

※1 源博雅公…平安時代中期の音楽家。

※2 直衣…貴族の普段着。

※3 朱雀門…皇居の南の正門。

※4 浄蔵…平安時代中期の僧。

※5 門の楼の上…朱雀門の上。

※6 嘆声…ほめる声。感心する声。

※7 奏上した…申し上げた。

問一 波線の部分 a 「いはず」・ b 「かへて」を現代仮名遣い（ひらがな）に直して書け。

問二 傍線の部分①「あやしくて」の現代語訳として、最も適当なものの記号を書け。

ア 不気味に思っ

イ 不思議に思っ

ウ 珍しく思っ

エ うれしく思っ

問三 傍線の部分②「かの人の笛の音」とは誰の笛の音か。解答欄の「ゝの笛の音。」に続くように、本文の古文から十二字で抜き出して書け。（句読点を含む。）

問四 傍線の部分③「朱雀門のあたりにて得たりけるとこそ聞け。」とあるが、この中から係りの助詞を抜き出して書け。

問五 浄蔵が帝の仰せの通りに笛を吹くためには、二つの条件を満たす必要がある。その条件を、本文の古文からそれぞれ三字で抜き出して書け。

問六 傍線の部分④「『なほ逸物かな』とほめける」とあるが、その理由を書け。

